

【氏名】 古川 直樹

【所属大学院】(助成決定時)

広島大学大学院 総合科学研究科

【研究題目】

イラン・第二代パフラヴィー王朝における支配と抵抗の政治文化に関する歴史学的研究

【研究の目的】

本研究は、イラン・パフラヴィー朝(1925-79)第二代国王モハンマド・レザー政権期(1941-79)のうち、特に国王自身の権力集中が認められる1953年以降を研究対象時期に設定し、当該期における支配と抵抗の変容を歴史学的に分析するものである。

当該期に関わる先行研究は大きく次の3つに分類できる。①外交史研究、②革命の原因分析、③政治組織および政治アクターの研究である。①に関しては、内政分析の空白が課題として残されており、②に関しては経済的側面や社会学的アプローチによる研究が顕著である。③においては体制側政治アクターに関する研究には注目すべきものが多いものの、反体制組織に関する研究は前者の研究および①と②に比べその蓄積が未だ浅いと言える。

本研究においては、「政治文化」の視点から体制側の支配と革命に至る反体制運動の変容の総合的な把握を試み、これにより上記先行研究だけでは見出せない79年イラン革命に対する新たな理解を補うことを目指した。

【研究の内容・方法】

政治文化とは支配体制側と反体制側の相互関係の中で構築されるものであると考える。一般に反体制側の「抵抗の政治文化」とは、政府の体制安定化政策と経済状況により規定されると言われている。同様に、政府の体制安定化政策の一部は抵抗の政治文化に対抗する「支配の政治文化」構築の努力と見なすことも可能であろう。

本研究ではこうした「政治文化」の理解のもと分析を加えた。結果、以下の如き当該期イランにおける支配と抵抗の政治文化の変容を示すことができた。

当該期を通じて支配の政治文化は、アーリア人にその起源を求めるイラン・ナショナリズムの宣伝(イランにおける王政の正統性確保)および対西側同盟を前提とした社会・文化の西洋化と国家主導の資本主義的経済発展が基礎となっていた。特に経済発展は民主化の発展を脇に追いやるものであった。この政治文化は国民に対する物質的・精神的福祉の供給と力による抑圧に支えられていた。この政治文化の推進は1960年代以降活発化し、70年代前半に絶頂を迎える。国民を国家公務員として採用しつつ、反対者には軍隊や57年に創設された情報機関を使って抑圧した。しかし、70年代はまた経済的矛盾が表出した時期でもあった。インフレが発生し、貧富の差

が拡大した。ここに支配の政治文化の限界を見ることができる。

抵抗の政治文化は多様なものであった。これは 60 年代初頭に一つの転換点を迎えた。50 年代の抵抗運動は 40 年代に台頭した世俗的ナショナリズムを継承したものであったが、熾烈な体制の抑圧の中、徐々に政治的思想基盤としてイスラームに注目が集まり 60 年代に入り開花した。これは 2 つの流れをもつ。ひとつは革命の指導者となるホメイニー派の台頭であり、今ひとつは世俗的教育を受けた宗教的近代主義者である。後者は後にいくつかの勢力に分派した。結果、革命の序曲となる 70 年代の終盤に入ると上述の宗教的諸勢力のみならず世俗的諸勢力も運動に参加し、種々の政治文化が並立するなかで革命が達成された。

#### 【結論・考察】

79 年イラン革命はしばしば「ホメイニー革命」や「イスラーム革命」と呼称される。しかしながら、政治文化の視点からこの革命を見直せば、これら 2 つの呼称では表現できない多様な性格を持った革命であったとすることができる。革命達成時にはホメイニー派勢力だけでなく、世俗的ナショナリストや社会主義勢力、先の宗教的近代主義者勢力やその分派であるイスラーム社会主義を掲げた急進派も存在し、特に後者 2 勢力は多くの支持者を抱えていた。われわれが言う「イスラーム革命」とは、全集団の中でいち早く権力基盤を固めたホメイニー派勢力が行使する革命後の政治文化を表すものであると言える。

ここで一点今後の課題を示したい。イラン革命が「イスラーム革命」とは言えないものであったとしても、イスラーム的性格を強く持った革命であったことは確かである。この点に鑑み、ホメイニー派勢力とは異なる宗教的政治文化を表明した宗教的近代主義勢力の研究に着手し、ホメイニーとは異なる今ひとつのイラン革命のイスラーム的性格の解明を行いたいと考えている。